

隈研吾

僕の場所

大和書房

僕 の 場 所

隈
研
吾

大和書房

隈 研吾 (くま・けんご)

1954 年、神奈川県横浜生まれ。隈建築都市設計事務所主宰。

1979 年東京大学大学院建築学科修了。コロンビア大学客員研究員、慶應義塾大学教授を経て、2009 年より東京大学教授。1997 年「森舞台 / 登米町伝統芸能伝承館」で日本建築学会賞受賞、同年「水 / ガラス」でアメリカ建築家協会ベネディクトス賞受賞。2002 年「那珂川町馬頭広重美術館」をはじめとする木の建築でフィンランドよりスピリット・オブ・ネイチャー 国際木の建築賞受賞。2010 年「根津美術館」で毎日芸術賞受賞。2011 年「橋原・木橋ミュージアム」で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

近作に「アオーレ長岡」「第五期歌舞伎座」「KITTE」「ブザンソン芸術文化センター」「マルセイユFRAC」「エクサンプロヴァンス音楽院」など。日本国内だけでなく、世界中でプロジェクトが進行中。

著書に『IO 宅論』(ちくま文庫)、『建築的欲望の終焉』(新曜社)、『負ける建築』『つなぐ建築』(いずれも岩波書店)、『自然な建築』『小さな建築』(いずれも岩波新書)、『建築家、走る』(新潮社)など。

僕^{ぼく}の場所^{ばしょ}

2014 年 4 月 30 日 第 1 刷発行

著者 ● 隈 研吾

発行者 ● 佐藤 靖

発行所 ● 大和書房

東京都文京区関口 1-33-4 〒112-0014

[電話] 03(3203)4511

カバーデザイン ● 奥定泰之

本文デザイン ● 内野正樹

編集協力 ● 内野正樹、隈研吾建築都市設計事務所 (稲葉麻里子)

本文印刷 ● 信毎書籍印刷

印刷 ● 歩プロセス

製本所 ● 小泉製本

©2014 Kengo Kuma, Printed in Japan

ISBN978-4-479-39257-6

乱丁・落丁本はお取替えいたします

<http://www.daiwashobo.co.jp>

僕の場合●目次

はじめに——樹木のように生きる 3

第一章

大倉山 I

境界人 16

マックス・ウエーバー 18

ゴシック 21

本経寺 23

農家 25

エンゲルス 27

湯河原カンツリー倶楽部 29

孔、橋 33

里山 40

シングルスキン 42

床 44

土間 46

黄色い長靴 50

竹ヤブ 52

崩れかけた家 56

積み木 59

千鳥 61

隙間 69

第二章

大倉山Ⅱ

フレキシブルボード 74

正方形 77

設計会議 79

後藤勇吉 83

現前性 85

増築的 88

中央郵便局 91

ブルーノ・タウト 93

関係 96

歌舞伎座 99

ブリコラージュ 104

安さ 106

紹興酒 108

光天井 114

ワイシャツ 118

ファブリック 121

第三章

田園調布

アーツ・アンド・クラフツ 126

田園調布幼稚園 128

拒否権 129

10 宅論 131

セパ孔 132

レイトカマー 137

代々木体育館 139

獣医 140

垂直 142

第四章

大船

イエズス会 150

身体 151

中間体操 154

黙想 156

ヨオロッパの世紀末 160

反ユートピア 162

1970年 163

大阪万博 166

メタボリズム 168

反建築 170

トレー 172

細胞 174

CIDORI 178

シカゴ万博 179

第五章

サハラ

オイルショック 184

モダン 186

虚の透明性 189

アメリカの時代 192

鈴木博之 194

ジョサイア・コンドル 196

内田祥哉 198

スクラッチタイル 200

フラット 202

木造精神 204

オープンシステム 206

バックミンスター・フラー 208

テンシグリティー 211

原広司 213

サバンナの記録 215

砂漠 217

鏡 221

註 233

おわりに 243

湿った集落 223

コンパウンド 224

植物 227

小さなもの 228

僕 の 場 所

隈
研
吾

大和書房



はじめに——樹木のように生きる

僕の日常は移動です。現場から現場へと移動し、打ち合わせから次の打ち合わせへと、飛び回っています。もうそろそろ落ち着いて、一つの場所にじっとしていたいのに、と助言を受けることもしばしばです。ミーティングだって、現場のチェックだって、ネットを使えば簡単なのという助言です。

「映像じゃ、質感やディテールの一番重要な部分が抜け落ちて、全然チェックにならないんだよ」とか「顔と顔を突き合わせて打ち合わせをしないと本心が伝わらないんだよ」と答えるのですが、冷静に考えると、僕にとっては、どうも移動すること自体が必要のようなのです。移動によっていろいろな人、物に出会うことが、僕にはどうしても必要なのです。

人間を移動する存在として定義する試みは、たびたび行われてきました。

1970年代には、ホモ・モーベンスという言葉が流行しました。ホモ・エレクトス、ホモ・サピエンスの次はモーベンスだということです。2000年代にはノマド——定住型ではなく、遊牧型——の生き方が主流になるだろうという議論が活発でした。

しかし、僕は自分のことをノマド的だと思ったことはありません。移動する動物だと考えたことはありません。強いていえば、自分は樹木のような存在だと感じています。

どういうところが樹木なのでしょう。痕跡を残しながら生きているところが、樹木的であると感じるのです。

動物は移動の跡をあまり残しません。草も枯れてしまえば痕跡は何も残りません。しかし樹木は、その存在自体が、それまで生きてきた年月の痕跡なのです。実際に生きて活動しているのは、小枝や葉っぱという限られた部分で、樹木の見えているものの大部分は、その活動の痕跡、専門的にいえばリグニンという名の、木の幹を構成する物質なのです。痕跡が構造物になって、今という活動を支えているところが、樹木という存在のすごさなのです。

僕は建築物という痕跡を残しながら移動しています。痕跡を残すのが僕の仕事です。しかし、建築家だけが痕跡をたくさん残しているわけではありません。人間は日記を書いたり、写真を撮ったり、ツイートしたり、昔から痕跡を残すことに必死になる生物なのです。家を建てるというのも、そんな痕跡願望のなせるわざであることは間違いがありません。

建築家ではなくても、人間には痕跡が必要であり、樹木が痕跡によって立ち続けていられるように、人間もまた痕跡によって、自分を支えているもののなのです。

最近は一Tによって痕跡の生産効率も保存技術も格段に高まり、人間と痕跡との関係は、より近しくなったようにも感じられます。

また痕跡のトレース、検索も一Tのおかげでとても簡単になりました。人間の樹木化が一Tによって進行しているといういい方もできます。

しかし痕跡はトレースできても、その樹木がどんな土から栄養を得て、どんな水を吸いあげてきたか。どんな光を浴びて、どんな風に吹かれて育ってきたかは、なかなか検索にはのってきません。痕跡の情報ばかりが肥大化すると、かえって樹木は自分から遠いもののように感じられてしまうのです。

この本を書いた動機は、自分にとっての土、水、光、風を思い出してみただけです。土、水、光、風は検索にひっかからないだけではなくて、自分でも忘れてしまいがちです。

思い出すにあたっては、場所が手になりました。だから章のタイトルは場所の名前です。クロニカルに、すなわち年代順に記述するのではなく、場所順に記述するというスタイルになりました。

建築は場所の産物であるということを、最近はお繰り返し語り、また実践もしているわけですが、僕という人間自体が場所の産物だったわけです。生まれた場所、住んでいた場所、学んだ場所、決定的な場所のことを思い浮かべると、そこからまた記憶が沸き上がってきます。僕の、考え方、行動の形式、思考の形式、すべてが場所に深く依存しているのだと痛感しました。その意味でも僕は樹木的な人間であると思ひ至ったのです。

そうやって思い出したことを書き留めておくことは、自分のためでもあり、また若い人達が僕を身近な仲間として、フラットな存在として感じてもらいたいという気持ちもありました。

若い人を意識して、一般教養の教科書という隠し味もつけてあります。たとえばマックス・ウェーバーによる、資本主義分析が出てきたり、宗教と美学との関連性の話も出てくるし、レヴィ・ストロースも梅棹忠夫も出てきます。

モダニズム建築という言葉にはなれっこになっていますが、そもそもモダンとは何か、近代とはどういう時代なのかということにも、さりげなく踏み込んでみました。学生と話す時も、その手のベーシックな話をすることはほとんどないからです。実は建築や社会を考える上で一番重要な話なのですが、そこまで掘り下げて話出すと、時間がどれだけかかるかわからないし、ベーシックな話をするというのは、ちよつと照れくさいものだからです。

書くときそれほど恥ずかしくはなかったし、僕自身のパーソナルヒストリー（痕跡）とからめて書くことで、教養というものを、地面の上に引きずり降ろしてこようと考えたのです。

教養というのは、実は毎日を生きていく上でとても力になってくれるもので、それは樹木にとっての土や水のような形で、僕の体を支え、守ってくれているのです。まさに「人はパンのみにて生きるにあらず」なのです。

そう考えて、今までの僕の本とは違う書き方をしました。今までの本は、痕跡のこと、立っている樹木の姿について書いてきましたが、この本は樹木を育ててくれた土、水、光、風が主役で、それが検索可能で目に見える樹木の姿と、どうつながっているかについても、少し触れています。世界はつながっているということが、いたかったのです。